

花すすき集 昭和四年六月以降の句 : 句

著者	平木, 恭三郎
雑誌名	龍南
巻	2 1 1
ページ	3 2 - 3 4
発行年	1929-12-10
URL	http://hdl.handle.net/2298/6904

花すすき集

— 昭和四年六月以降の句 —

平 木 恭 三 郎

水汲めば綱のしめりのうれしさよ

濁水に月かかりたるつばめかな

月見草のほのかなる香や折りて嗅ぐ

冷々と棄てし螢や明滅す

石竹の生ひすぎて花ひらかざる

落梅や足跡ちさき苔のうへ

雨蛙まぎれこみたる早苗かな

紫陽花の菱にうつりて夕榮ゆる

紫蘇の葉をつむたらちねの日焼せる

倒れ馬堤の栗にうづめけり

二年を藪の蜻蛉をとらざりし

ゑがゝばや紙一面にはなすすき

句手帖の花すすきある筆すさび

稻妻やすすすき活る僧若き

まくわ瓜の色を愛してえとらざる

泉水の濁りにあきの立つらしき

笠三つそれぞれに吹く秋の風

順禮や幾人すぎしすすきばら

寺々をめぐりて來たる寛かな

よもすがら秋風庭をめぐりけり

をすすきに亂れて遠きいねのつま

瓜のみは家になりしをそなへけり

(魂祭)

魚の香のかすかなる手を疲れいぬる

野稻食ふ子馬やせたる尾の動き

穂に出て淋しくくれる野稻かな

萍やつめたく宵をながれけり

すすきばらの彼方を旅の道あらん

鶏頭のいまだ小き残暑かな

暮さびし芒の原の小石橋

さるすべり馬病むごときいきづかひ

やればせう或夜音なく折れにけり

粟の穂のせる手におもきしたしみ

まばらなる白菜さびしき虫の聲

玉垣の落書さびし柿落葉